

エズラ・パウンドの「プロペルティウス讃歌」

—その重層化された意味—

萩 原 輝

Ezra Pound's "Homage To Sextus Propertius":
Its Multiple Meanings

Teru Hagiwara

1919年の「ポエトリー」誌3月号に初めて、エズラ・パウンドの「プロペルティウス讃歌」("Homage to Sextus Propertius")は掲載された。だがこの時は、ハリエット・モンローの意向で、ここに掲載されたのは全12編のセクションのうち、I, II, III, VIの4つのセクションだけであった。その後すぐにシカゴ大学のW. G. ハイルが「プロペルティウス讃歌」の中にある文法的誤訳を挙げ、パウンドに批難を浴びせたのは、有名な出来事である。

そして1919年10月に『クイア・パウペル・アマーヴィ』(*Quia Pauper Amavi*)という詩集が出版された。その中で初めて「プロペルティウス讃歌」のIからXIIのセクションすべてが収められたのである。

翌年の1920年に「ヒュー・セルウィン・モーバリー」が出版される。この「モーバリー」は、F. R. リーヴィスを始め、多くの人から高く評価されているのであるが、それと比べてみると、「プロペルティウス讃歌」は、あまり評価されていないと言えよう。

だが、「プロペルティウス讃歌」、「モーバリー」そして『詩章』というパウンドの作品の流れを見てみると大変重要な作品であるように思われるのである。

そこで今回は、特にVIの詩を取り上げて考察してみたいと思う。

パウンドの「プロペルティウス讃歌」の基になったのは、古代ローマ詩人セクストゥス・プロペルティウス(前50頃—前16頃)の『プロペルティウス詩集』という作品である。この詩集は、全4巻から成る短詩の集まったものである。その中ではプロペ

ルティウスが恋人キュンティアという女性に対して抱く喜び、苦しみ、悲しみなどが描かれていたりあるいは、古代ギリシア詩人のカルマユスとピリータースのような客観的抒情詩人の後継者になろうとするプロペルティウスの姿などが描かれている。

パウンドは、プロペルティウスの『詩集』の中から、主に第二巻と第三巻からいくつかの詩を選び、それを翻訳、あるいは翻案したものを再構成して12の短詩から成る一つの作品を作り上げた。それが「プロペルティウス讃歌」である。

それでは、「プロペルティウス讃歌」のⅥの詩を具体的に見てみたい。

When, when, and whenever death closes
our eyelids,

ああ、死、死、死がぼくらの瞳を
閉じようとするときには必らず

Ⅵの詩は、プロペルティウスの原詩でいうと、第2巻の13番目の詩が中心に用いられている。

「ぼくらの瞳を」という部分は、プロペルティウスの原詩では「ぼくの瞳を」とあり、プロペルティウスを指しているのである。パウンドは、そこを複数形の「ぼくら」としたことについて何か理由があるように思われるが、それについては、後に考察したい。

Moving naked over Acheron

Upon the one raft, victor and conquered together,
Marius and Jugurtha together,
one tangle of the shadows.

マリウスとユグルタが一緒に、
あの戦争の勝者と敗者が共に一つの筏に乗って
冥界の川アケロンを裸で渡っていく
二人の影が一つに交り合う

マリウスとは、ローマの執政官のことである。彼は紀元前104年にヌミディア（今の北アフリカ）の王ユグルタと戦って勝利を収めた。ここでは、プロペルティウスが生まれる数十年前に起った戦争での勝者と敗者が同じ筏に乗って冥界の川を渡っていく姿が描かれている。死者の国では、勝者も敗者もなくなり、平等になってしまうと

いう事と、戦争に身を費すことの愚かさが描かれていると言えよう。

今読んだ4行は、原詩では別のセクションにあったものをパウンドがコラージュしたもので、元は第三巻の5番目の詩の一部である。

死というモチーフをうまく用いて二つの詩をジャクスタポーズ（並置）している。

Caesar plots against India,
Tigris and Euphrates shall, from now on, flow at his bidding,
Tibét shall be full of Roman policemen,
The parthians shall get used to our statuary
and aquire a Roman religlon;

シーザーがインドを狙っている
これからはチグリス・ユーフラテス川も
彼の思いのままに流れるだろう
チベットは、ローマ人のお巡りさんで溢れ、
中東の人々もすぐにローマ人の彫像に慣れ
ぼくらと同じ宗教を受け入れることだろう

プロペルティウスが生きていた頃のローマ帝国の描写の部分である。その頃のローマではシーザーの独裁政治、そして第二回三頭政治（アントニウス、レピドウス、そしてオクタ비아ヌスによるもの）が行われ、そしてオクタ비아ヌス（後のアウグストゥス）による政治が行われた。それに伴ってローマは、次々と領土を拡大していった時代であった。

今読んだ部分では、シーザーのとり帝国主義政策を表面では賞讃しているように書きながら実は、皮肉っているというのが、“get used to”や“acquire”という言葉使いから分ると思う。

この6行もパウンドが更に別の巻（第3巻4番目の詩）にある詩をコラージュしたものである。

ここで先程の「マリウスとユグルタが一緒に…」で始まる詩句との関係を考察したいと思う。シーザーが次々と植民地を増やしていく姿は、「マリウスとユグルタ…」の詩句と並置されることで、戦争での勝者マリウスと重なっているのである。いくら戦争で勝ったとしても、冥界に行けばシーザーもマリウスと同様に、戦争での勝者という肩書きや名声を剥ぎ取られ裸になってしまうことが暗示されることになる。

ここでは、戦争の愚かさ、あるいは、戦争に夢中になっている時代の愚かさが描かれているのである。

それでは次の部分を読んでみよう。

One raft on the veiled flood of Acheron,
Marius and Jugurtha Together.

あのマリウスとユグルタが共に、
雲でおおわれたアケローンの川を一つの筏に乗って

ここは、先程出てきた詩句をパウンドが短くしたものである。

Nor at my funeral either will there be any long trail,
bearing ancestral lares and images;
No trumpets filled with my emptiness,
Nor shall it be on an Atalic bed;
The perfumed clothes shall be absent.
A small plebeian procession.
Enough, enough and in plenty
There will be three books at my obsequies
Which I take, my not unworthy gift, to Persephone.

ぼくの葬儀の時には家の守り神ラレースの像や、祖先の肖像を持った
長い列などいないし、
ぼくの人生の終りを嘆くラッパの音もない
金糸織りの布を敷いた棺に、ぼくを寝かせたりしないでくれ
それに香の匂いがする経帷子もない
ただ庶民の小さな行列さえあれば
本当にそれでもう十分なんだ
ぼくの埋葬式には、本が三冊供えられるだろう
それをぼくはペルセポネーに
最高の贈物として捧げよう

ルールとは家の守護神のことである。古代ローマでは、葬儀の際にはルールを表わす像あるいは、家族の先祖で官職を勤めた人たちの肖像画ぶデスマスクをいくつも連

ねた葬列を作ること在家柄を誇る習慣があった。

ペルセポネーとは、冥界の王ハーデスにさらわれて妻となり、死者の霊を支配することになる冥界の女王のことである。

さて、プロペルティウスの原詩では、詩の冒頭の「ああ、死、死、死がぼくらの瞳を／閉じようとするときには必らず」に続く詩は、今読んできた「ぼくの葬儀の時には…」に続くのであるがパウンドは、その間に三種類の詩句を挟み込んだのである。これ以後は、この詩の最後まで、冒頭部分と同じ第2巻の13番目の詩の翻案である。

今の部分では、もし自分が死んだら、世間の人がみな同じようにするような形式的なしきたりは、やめて欲しい。それよりも自分を本当に理解してくれる人がほんの少しでもいてくれればそれでよいのだということを表していよう。

次に「ぼくの埋葬式には、本が三冊供えられるだろう／それをぼくはペルセポネーに／最高の贈物として捧げよう」という部分であるが、これはパウンドが好んだフレーズである。1911年出版の *Canzoni* という詩集や、*Ripostes* (1926年出版の *Personae* に収められたもの) のエピグラフに使っているのである。

さて、この“本が三冊”という部分であるが、二つの解釈が考えられる。まずこれをプロペルティウスが書いた本と解釈したい。そこで今迄見てきた部分との関係を考えてみると、戦争での勝者になっても、冥界では裸になってしまう。しかし、本当の美や詩は、時の流れや、死にも打ち勝って残るものであるから、詩人であるプロペルティウスは、自分の作品を携えて冥界の川を渡り、ペルセポネーを喜ばせることが出来るという意味になるのではないであろうか。また別の解釈では、詩人としては、高価な供え物より、本の供え物（おそらく詩や芸術を表わすもの）が一番ふさわしい。たった三冊でよいからそれをペルセポネーに捧げたいということかもしれない。

You will follow the bare scarified breast
Nor will you be weary of calling my name, nor too weary
Toplace the last kiss on my lips
When the Syrian onyx is broken.

お前は、ぼくの傷ついた裸の胸の後に追いて行くだろう
そして、シリアの縞めのうの容器が開けられる時に
お前はぼくの名前を呼び続け、
何度も何度もぼくの唇に、別れのキスをするだろう

ここに出てくる「お前」という人物は、プロペルティウスの恋人キューンティアのことである。次に「シリアの縞めのうの容器が開けられる時に」という部分であるが、当時は死体に香水を振りかける習慣があった。だから最後の別れの時にということであろう。

“He who is now vacant dust

“Was once the slave of one passion:

Give that much inscription

「今は塵となっているがこの男は、

かつては、ある愛の奴隷だった」

墓には、そう記して欲しい

“愛の奴隷”とは、狭い意味ではキューンティアへの愛の奴隷ということになろう。それを少し拡大してみれば恋愛抒情詩に身を捧げたともとれると思う。

この部分は二通りに解釈が出来る。すなわち人々の目が戦争といった公的なものばかりに向いていた時代にもっと私的な世界きである愛や芸術の世界を大切に生きた芸術家の姿を表しているととれる。また別の解釈では、社会という公的な世界には目を向けずに、もっぱら私的な世界にしか目を向けなかった芸術至上主義者の自分への反省ともとれよう。

“Death why tardily come?”

ああ、死よ、どうして早く来てくれないのだ

パウンドは、原文ではこの詩句の前にある13行をすべて省略している。

原文では、これは、ネストルの科白である。ネストルとは、大変長生きをしたピュロスの王でギリシア軍がトロイア遠征した時に、最長老だった。だがその息子がトロイアで殺されてしまった時に、自分よりも早く死んでしまったことを嘆いたときの科白である。

パウンドがこの部分を省略したので、この科白は、直接プロペルティウスが語ったように読める。そのため、プロペルティウスが、この時代に生きているのがいかにつらいかが強調されている。

You, sometimes, will lament a lost friend,

For it is a custom:
This cave for past men,
Since Adonis was gored in Idalia, and the Cythayean
Ran crying with out-spread hair,
In vain, you call back the shade,
In vain, Cynthia. Vain call to unanswering shadow,
Small talk comes from small banes.

なあお前、時々は失われた友のために泣くだろう
だがそれは慣習に従ったからだし、また
死んだ者への心使いからしたことだ

アドーニスが、イタリアで突き殺されると
アフロディーテの崇拜者は、解いた髪を
振り乱して、泣きながら走った

だが死んだ者に呼びかけたってだめだ
無駄なんだ、キュンティア

口きかぬ亡霊に呼びかけたって

小さな骨くずになってからでは、もう口がきけないんだ

恋愛の女神アフロディーテは、息子のエロスと遊んでいたとき、エロスの持っていた矢で自分の胸を傷つけてしまう。そしてその傷が癒えないうちにアフロディーテは、アドーニスを見てしまい彼の虜になってしまう。だがある日アフロディーテの忠告に従わず森で狩りをしていたアドーニスは、猪に突かれて殺されてしまう。それを悲しんでアフロディーテは、^{ネクター}神酒をアドーニスの血に注ぎ、アネモネとしてアドーニスが復活するという物語。

ここでは、自分が死んでしまってからでは、もういくら自分を大切に思ってくれても手遅れなのだ。だから生きている今こそ大切にしたいというプロペルティウスのキュンティアに対する切実な気持ちが歌われている。

さてⅥの詩を一通り読んできたのであるが、この詩の後半のキュンティアとの部分は、恋愛詩として読むことがまずできるであろう。だが別の読み方も可能である。その鍵は、キュンティアにある。

プロペルティウスの恋人であるキュンティアという女性は、実は王侯、貴族、金持

ちなどを相手にする高級娼婦であったと言われている。だが誰とでも相手になったのではなく、自分で恋人についての選択をし、嫌いな男は拒み、好きな男とは本当に恋もした。しかし生活のためには、詩人よりも、金持ちの恋人を選ぶことが多くなるのである。そこで詩人は自分の恋人の浮気や打算に対して悩み、苦しみ、恋愛詩が生まれるのである。

では何故そのような高級娼婦との恋かというと、当時の女性は普通12歳のころ、父親の決めた相手と結婚してしまう。そこで詩人は人妻か、あるいは高級娼婦と恋をするしかなかったのである。

彼にとっては、真の愛情ではなく、政略や打算によって維持されている結婚の方が不自然なものだったのである¹⁾。だから自由に恋愛をし、それを詩にすることは、そういう社会への反抗でもあったのである。

だから、プロペルティウスにとって恋人のキュンティアは詩的靈感の源でもあった。その事は例えばVの2の詩“My genius is no more than a girl.”(ぼくの詩の源は、女の子なんだ)といった詩句にも表れている。そしてキュンティアはプロペルティウスの理解者であり、また時には彼の詩の読者でもあった。

そしてさらにそれを拡大して考えてみればプロペルティウスを取り巻く時代に生きる大衆の一人とも考えられよう。

このようにキュンティアを、恋人だけでなく、様々な役割をもった人物として、プロペルティウスは描いているのである。

この事を考え合わせると、VIの詩は恋愛詩として読めるだけでなく、ある詩人が、自分の詩を理解して欲しいという気持ちを同じ時代に生きる人々に対して訴えている詩とも読める。

さてパウンドは、1961年の『イングリッシュ・ジャーナル』誌 (*The English Journal*) の編集者に次のような手紙を送っている。「『プロペルティウス讃歌』は、イギリス帝国の言い尽くしがたい愚劣さに対決していた1917年の私に決定的な意味を持っていた感情の記録であって、その感情は何世紀も昔にプロペルティウスが、ローマ帝国の言い尽くしがたい愚烈さに対決した際に彼にとって決定的な意味を持っていたものと同じなのである。」²⁾

この手紙は明らかに「プロペルティウス讃歌」を、1917年当時のパウンドが、領土拡大政策に夢中になっているイギリスと対決した時に抱いた感情と、古代ローマ帝国の帝国主義に対決した時に抱いたプロペルティウスの感情とを重ねて読んでもらいた

いと読者に指示していると言えよう。

すなわちプロペルティウスを、パウンドのペルソナ（仮面）として読む読み方である。Ⅵの詩の冒頭の部分で“*My eyes*”と原文にあるのをパウンドは“*Our eyes*”としたのは、もしかすると“プロペルティウスとパウンド”ということを表すためだったからかもしれない。

だが、パウンドが、プロペルティウスの原詩のエッセンスだけ取り出して濃縮した翻訳を十分に理解するには、今まで考察してきたように、古代ローマ時代の社会状況、詩の中の様々な神話の意味、何故恋愛詩のスタイルで書いたかあるいは、キュンティアの持つ様々な意味は何かなどを理解していなくてはならず、更にその上、プロペルティウスとパウンドとを重ねてこの作品を読んでいく事は、一般読者にとっては、なかなかむずかしい事である。

それにそのような読み方をしなくとも、読者は十分に楽しめる作品であるし、パウンドの抒情的な部分がうまく出ている見事な作品であるように思われる。

なるほどプロペルティウスをパウンドと重ねて読む事で、作品かに重層的になり、T. S. エリオットが『ユリシーズ』に対して述べたような「神話的構造」を持つことになるのであろう。

だが、それではパウンドにとってのキュンティアとは一体どのような人物を指し、また恋愛詩とパウンドの関係は一体どういうものかという疑問が残る。これらの疑問はただ「プロペルティウス讃歌」を読んだだけではなかなか分らない点である。

それを考えるには、「プロペルティウス讃歌」の翌年に出版された『ヒュー・セルウィン・モーバリー』と比較対照するのが一つの方法であると思う。1932年ジョン・ドラモンドへの手紙の中でパウンド自身が『モーバリー』は、「プロペルティウス讃歌」の単なる翻訳にすぎないのだ⁹⁾と述べている。この言葉からもいづれか納得していただけたと思う。だがこれについては稿を改めたいと思う。

ただ一つ付け加えておきたいのは、これら二つの作品を比較してみると、実に色々な部分の意味が分ってきて、お互いがお互いの良い注釈の働きをすることである。

さて以上で、「プロペルティウス讃歌」について考えてみたわけであるが、パウンドがプロペルティウスから、いかなるものを学んでいったかを考えてみることは、後の『モーバリー』や『詩章』を理解する上で、大変重要なことに思われるのである。

[Text]

“Homage To Sextus Propertius (1917)” in *Personae: The Collected Shorter Poems of Ezra Pound* (A New Directions Book, 1971)

[注]

- 1) 中山垣夫編訳「プロペルティウス詩集」の解説文、『ローマ恋愛詩人集』（国文社，1985），pp. 598-614.
- 2) D. D. Paige (ed.) *The Letters of Ezra Pound: 1907-1941* (Faber, 1951) p. 310.
- 3) Ibid., p. 321.

[参考書目]

- 1) McCULLOCH, J. P. *The Poems of Sextus Propertius*. Berkley: University of California Press, 1972.
- 2) Sulliran, J. P. *Ezra Pound and Sextus Propertius: A Study in Creative Translation*. Austin: University of Texas Press, 1964.
- 3) 高津春繁著『ギリシア・ローマの文学』（『世界の文学史 I』）（明治書院，1967）
- 4) 中山垣夫編訳『ローマ恋愛詩人集』（国文社，1985）
- 5) マイケル・グラント/ジョン・ヘイゼル共著，西田実他訳『ギリシア・ローマ神話事典』（大修館，1988）

（はぎわら てる 本学兼任講師 英語）